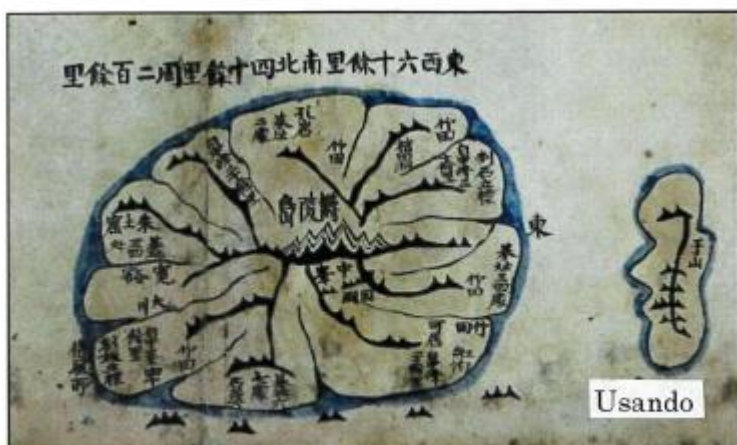


金正浩の筆写本『大東輿地図』の于山島は、独島ではなかった 拓殖大学教授 下條正雄

韓国の聯合ニュース（電子版）が8月2日、「独島を描いた『大東輿地図』筆写本、また日本で発見」と報ずると、「独島を描いた『大東輿地図』筆写本また発見...韓国領を立証する資料」（「ニュース1」電子版）、「発見された真実の証拠...独島のある『大東輿地図』筆写本」（「韓国日報」電子版）等とマスコミ各社が追随した。

于山島が描かれた『大東輿地図』の筆写本を発見した慶北大学の南権熙教授は、その理由を次のように説明している。「金正浩が1834年に完成した彩色の青邱図を見ると、独島が鬱陵島の右側に描かれているが、これより後代に作られた大東輿地図には独島がない」ので、「木版本（『大東輿地図』）で抜けていた部分を後代に筆写本を制作する際に補ったものと推定される」。



Hand drawn reproduction of Map of the Great East Land

ここで南権熙教授が『大東輿地図』の筆写本に描かれた于山島を独島としたのは、韓国側では1770年に編纂された『東国文献備考』（「輿地考」）の分註を根拠に、于山島を独島としてきたからである。その分註には、柳馨遠の『東国輿地志』を引用して、「于山則倭所謂松島也（于山はす

なわち倭の所謂松島（現在の竹島）である）」と記されている。

だが原典の『東国輿地志』には、「于山鬱陵本一島」（于山島と鬱陵島は同じ一島である）とあるだけで、「于山則倭所謂松島也」とした記述はない。これは1696年、鳥取藩に密航した安龍福が帰還後、朝鮮側での尋問に対して、「松島は于山島だ。これも我朝鮮の地だ」とした証言が、『東国文献備考』（「輿地考」）の分註に採用されていたからである。

南権熙教授は、『大東輿地図』の筆写本に描かれた于山島を独島としているが、それは実証された事実ではない。それに安龍福が「松島は于山島だ」とした于山島も、今日の独島ではなかった。安龍福は密航する際、『新增東国輿地勝覧』に由来する『東覧図』系統の「朝鮮八道之図」を持参したが、その『東覧図』

に描かれていた于山島は、鬱陵島の西側に、鬱陵島の三分の二ほどの大きさで描かれていたからだ。安龍福は『東覧図』系の地図に描かれていたその于山島を、松島（竹島）と供述したのである。南権熙教授は、于山島が独島であったとする実証をしていないのである。

それにこの安龍福の密航事件をきっかけとして、朝鮮政府では鬱陵島に捜討使を派遣し、鬱陵島の疆域を描いた『鬱陵島図形』を作図させている。1711年、捜討使となった朴錫昌の『鬱陵島図形』では、于山島は鬱陵島の東2^キ程の竹嶼のこととされ、以来、于山島は竹嶼を指すことになった。于山島は、独島ではないのである。

そのため于山島が描かれた古地図を読む際は、『鬱陵島図形』系の于山島か、旧来の『東覧図』系の于山島かを検討する必要がある。その中で、金正浩が『青邱図』に描いた于山島は、『鬱陵島図形』系統の地図に由来する竹嶼であった。『青邱図』の于山島には、朴錫昌が「所謂于山島」に「海長竹田」と付記したように、岩礁の独島とは違って、樹木が描かれているからだ。

その『青邱図』から30年程を経て、金正浩が刊行した『大東輿地図』には于山島が描かれていない。それは金正浩が『大東輿地図』の刊行と前後して編纂



Map of Ulleungdo produced by Bak Seok-chang in 1711, after his official survey on Ulleungdo. North is right side. So, lower side is east, where “so called Usando”, a few kilometers east of Ulleungdo, is described.

した『大東地志』でも同じで、于山島は記載されていない。

『新增東国輿地勝覧』を底本に『大東地志』を編纂した金正浩は、『新增東国輿地勝覧』に由来する『東覧図』系統の于山島を削除したのである。

それが『大東輿地図』の筆写本が発見され、そこに于山島が描かれていると、南権熙教授はそれを後人による「補充」と見て、その于山島を独島としたのである。

だが木版本の『大東輿地図』と『青邱図』に描かれた鬱陵島には、「東西六十余里南北四十余里周二百余里」とした付記がある。鬱陵島の周回を「二百余里」とするのは、『鬱陵島図形』で、朴錫昌が鬱陵島の疆域を「周回堇可二百余里」としていたことが基になっている。さらに『鬱陵島図形』系統の地図では、于山島（竹嶼）の外に、小島が五つ描かれている。その五つの小島が、『青邱図』と筆写本の『大東輿地図』にも描かれているのは、それが『鬱陵島図形』系統の地図に由来することの証左である。

南権熙教授は、「補充」された于山島を独島と臆測したが、金正浩の『青邱図』に描かれていた于山島は竹嶼で、独島ではなかった。『大東輿地図』を筆写した後人は、その事実を知らずに于山島を「補充」したのである。

その事実を端的に示しているのが、鬱陵島の上部にある付記の「英宗十一年、江原監司趙最壽啓言。鬱陵島、地廣土沃有人居旧址。而其西又有于山島亦広濶。則所謂西字、與此図之在東相左」（英宗11年、江原道監司趙最壽啓してもうす。鬱陵島の地は広く土は沃（肥）え、人居の旧跡がある。その西にまた于山島があつて広濶である。すなわち所謂西の字、この図の東にあるのとは違っている）である。

南権熙教授はこの付記を「品格があつて、細密な書体」と評し、それを根拠に『大東輿地図』が筆写された時期を、英宗の廟号が英祖となる1898年以前と推測した。だがこの付記と同じ記述は、『青邱図』と『大東地志』にもある。この付記に依拠して、筆写の時期を推定することはできないのである。

だがこの付記には、新たに「則所謂西字與此図之在東相左」（すなわち所謂西の字、この図の東にあるのとは違っている）とした私見が加筆されており、その記述から于山島に関する知見がどの程度のものであつたのか、判断がつく。

趙最壽が「其西又有于山島亦広濶」（鬱陵島の西にまた于山島があり、広濶である）とした于山島は、鬱陵島の西に于山島が描かれた『東覧図』（『新增東国輿地勝覧』所収）の于山島であつた。だが金正浩の『青邱図』に描かれた于山島は、竹嶼であつた。それを「この図の東にあるのとは違っている」として、『大東輿地図』に描かれた于山島の位置だけを問題にしたのは、金正浩が于山島を竹嶼としていた事実を知らないまま、私見を書き込んでいた、ということである。

この私見から言えることは、木版本の『大東輿地図』が筆写された際、于山島が描き加えられたのは、南権熙教授が説明するような、『大東輿地図』を「実際に使用するためには、補完が必要なようであった」とする理由などではない、ということだ。

金正浩は『青邱図』には于山島（竹嶼）を描いていたが、木版本の『大東輿地図』では描いていない。これは『大東輿地図』の刊行と同じ時期、金正浩が編述した『大東地志』でも同様であった。金正浩の『大東地志』（「蔚珍」条）は、『新增東国輿地勝覧』の記事を踏襲したが、『新增東国輿地勝覧』に由来する于山島は削除した。『青邱図』以来、金正浩は、鬱陵島の三分の二ほどの大きさの于山島を、竹嶼としていたからである。それが『大東輿地図』が筆写される過程で、後人の独断で鬱陵島の右横に于山島を補充してしまったのである。

その筆写本を発見した南権熙教授が、その于山島を独島と推定したのである。韓国側の竹島研究には、歴史研究の基本である文献批判を怠って、文献を恣意的に解釈する傾向がある。于山島を竹嶼のこととした金正浩の意志に反して、『大東輿地図』の筆写本には于山島が描かれ、それを独島と曲解したのは、文献批判を疎略にした後代の賢しらである。かくして、韓国側では、虚偽の歴史が捏造され続けることになるのである。